

---

# 私は私。

尾野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は私。

### 【Nコード】

N2938L

### 【作者名】

尾野

### 【あらすじ】

初投稿です。タイトル変えました 旧名、気になって眠れない  
この作品は「好奇心旺盛な天才美少女、平井知恵、が異世界を研究する話」だったのですが、作者の指が暴走してしまい。大幅に進路が変更してしまいました。

今は「好奇心旺盛な天才美少女、平井知恵、が異世界へ行き、精霊の里にたどり着く。精霊の里の存在は人間に伝えられてはいけな

いのでそこで見たことを忘れさせられることになる、そのとき魔法の失敗で生まれてからの「思い出」が消えてしまう。「知識」だけが大量にある状態で知恵はどうするのか。」

なお、この作品はヘロー天気さんの異界の魔術士に影響を受けているので話が似ててもスルーしてくれると嬉しいです。

## 第一章 プロローグ 「異世界へ」 (前書き)

前略) ただいま大改訂中。改訂終了した分はタイトルが変わっています。

キャラ設定まで弄るのは自分でもどうかと思う……

## 第一章 プロローグ 「異世界へ」

「これで、よし！」

薄暗い部屋の中に少女の声が響く。

少女の背丈は小柄で、黒髪を腰上まで伸ばしている。少女の足下には本が開いてあり、本には魔法陣の様な模様が書かれている。そして、その模様と全く同じものがフローリングの床にでかでかとして写されている。

「あとは……」

少女、平井 知恵はノートを取り出すと、一枚ページを破って、こう書いた。

ちよつと、異世界に行つて来ます。 by ちえ

紙を机の上に置くと、ベッドの上に置いてある四次元リュック（知恵命名）を手に取り、魔法陣の上に立つ。知恵が魔力を流すと魔法陣は青白く光り、薄暗かった部屋を照らした。その光の中で知恵は言葉を紡ぐ。

私の肉体をからだ 貴方あなたの下にお招きください……

知恵の口から言葉が漏れるたび、魔法陣の光が強くなる。そんな中、知恵は感傷に浸っていた。

(二年前の私の誕生日、両親は私の希望通り、私が“知らないこと”が書いてある本をくれた。当時の私は興味があることは殆ど調べ尽くしていて、暇で仕方が無かったから……)

その本は魔法について書いてある本だった。興味本位でやってみたところ本当に出来てしまったのだ。それから知恵は、その本に書いてあることを自分の物にし、さらに本を書いた人を調べて弟子にして貰った。さらに“気”や“仙道”“陰陽道”なども実際にあることが解り、習得してしまったのだ。

(あははっ)

思わず笑ってしまふ。どうも新しい世界への期待によって気分が高揚しているようだ。……もう、呪文も終わりだ。これから異世界に行くことになる、新しい異世界への不安は……無い。帰ってくる方法もちゃんと考えてある。

……ラインバルドの神　ファウマスよ　私を、貴方の世界へと導いてください……

光が部屋を埋め尽くし、知恵の姿は消えた……。

## 第一章 プロローグ 「異世界へ」 (後書き)

前略) どうだったでしょうか。

自信はあまり無いですが、頑張ります。

第一話 「森の中で」 (前書き)

前略)さくさく行きます。



## 第一話 「森の中で」

目を開けると深い森の中だった。上を見上げると木漏れ日が目を差す。

「ここが異世界……。空気が澄んでいて、魔力に満ちている……」

知恵は辺りを見渡し、お腹から絞り出すように言った。木々の掠れ合う音や鳥の鳴き声が耳をくすぐる。

「師匠に感謝だね」

この世界に渡るための魔導書は、師匠に手渡された物だった。

師匠曰く「これ以上オマエに教えることはないな。俺が育った世界への行き方を教えるから、後は自分でがんばれ。（訳 オマエ、俺越えちゃったからもう教えること無いよ（涙、むしろ教わる立場だよ（再涙。だから後は自分一人で頑張ってくれ！！）」だそうだ。

師匠にもいろんな過去があったんだな、と思いつつも。免許皆伝とのことなので、若干悪い気もしつつ、異世界への好奇心と師匠を越えていることも本当なので、遠慮無く使わせて貰ったのだ。

ふと、後ろに殺気を感じる。知恵が振り向いてみると、少し離れた木の上で人がこちらに弓を構えている。知恵が両手を上げて敵意がないことを示そうとしたが。その人影はいきなり矢を放ってきた。

「危ないなあ」

知恵は魔法障壁を張って、飛んでくる矢を落とすと、光の鎖で人影を捕らえる。「キャ！」と言う短い悲鳴の後、どすん！と言う音が聞こえてきた。木から落ちたようだ。

悲鳴の声からして女性なのかな？　と言う疑問に包まれながらも人影がいた木の方に近寄る。そこには地面に転がり、DQの布の服のような服を着た（あくまでイメージ）美少女から美女になる間のような女性が頬を赤く染めて知恵を睨み付けている。女性は金髪に緑の瞳をしていて、よく見ると耳が尖っている。それを見た知恵は思わず呟いていた。

「エルフ？」

ホントにいるんだと目をぱちぱちさせていた知恵に向かって、エルフ（仮）は怒鳴りつけてきた。

「指一本でも触れてみなさいよ！　舌を嚙んで死んでやる！！」  
「ほえ？？　あれ？」

何で、と首を傾げる知恵にエルフ（仮）は、ますます怒ったように言った。

「とぼけないでよ！　私たちを捕まえて奴隷にするつもりだったんでしょ！」  
「ええっ！　そんなことしないわよ」  
「じゃあ、この魔法は何よ！　動けないようにして食べるつもりなんだわ！！　気持ち悪い！」

少し？　エルフ（仮）のテンションに付いていけなくなってきたようだ。知恵は出来るだけ落ち着いた声でなだめるように言う。



「そんなわけない！ オマエは誰だ！」

「わたしは知恵だよ。平井知恵。あなたは？」

なんて、のんきに返してくる。それがさらに苛立って、声を張り上げる。

「なぜ、あんなことをした！」

「あんなこと？」

「わ、私を！ その……」

口にする度に、そのとき思ったことを思い出してしまふ。……駄目だ考えがまとまらない。

「あれは、あなたが矢を放ってきたからだって、言ったじゃない。

何で私が矢を向けられたのか、こっちが聞きたいわよ」

「そっそれは私たちの森に入ってくるから……あっ！」

しまった！ 集落のことを人間に話してしまった。

「声、出てるよ？」

「はっつ！」

どうしようどうしよう、このまま帰すわけにも行かない！

「……私、帰っていいかな？」

「駄目……」

私はエルフ（やっぱり）の集落に来ていた。最初に会ったエルフの話によると、人間にエルフの森があることは知られてはいけな

らしい。だけど私を倒すのは無理そうだから、お爺ちゃん（族長）に会って、どうするか判断を仰ぐらしい。

通された部屋で待っていると若い男が三人、部屋に入ってきた。堂々とした態度で、真ん中の男が言う。

「お前は、我らがエルフの存在に気づいてしまった。人間は欲深い生き物だ。我らの存在が知れると、森を焼き我らを捕らえに来るやもしれん。」

男はそこで一度言葉を切った。私は続きを促す。

「それで？」

「うむ、お前にはこの村に関する記憶を封じさせて貰うが、それでもないな」

「いいですよ」

私があっさり頷くと男はホツとしたように頷いた。……あのエルフから、私なんて言われたんだろ。まあ、そんなに困っているなら協力しないわけには行かないよね。

男たちは待っていると言いつて部屋を出ていった。しばらくしてまた部屋を移動する。部屋には大きな魔法陣が書かれていた。どうやらかなり大掛かりな物らしい。

私が魔法陣の中にはいると周りの人？ 達が呪文を唱え始めた。魔法陣を使うほど大きな魔術は今日二度目だなく、なんて考えていた。

そこで私の意識は途切れる。

## 第一話 「森の中で」 (後書き)

改稿前の文を見たら全く違って驚くと思う(エルフてなんだよ)……。

悩むことが沢山あります…… エルフをMキャラにしてしまおうかとか、光の鎖より闇の手(某金属の錬金術師に出てくるようなやつ)の方が効率いいよね…… イメージ悪いけど、とか。

そのうち、設定をまとめたやつを上げないと自分で解らなくなるな。

## 第二話（前書き）

うわ、まったく設定考えてないのにどんどん書ける…面白いかどうかは別だけど

主人公の視点なのか第三者の視点なのか語尾が安定しないせいかわからなくなる…

## 第二話

「ここがあなた達の集落なのね．．．」

そのあまりの壮大きさに声を奪われてしまいそうになる、集落と言っても家が建っている訳ではない無  
い、

樹が生えているのだ、いや佇たたずんでいると言つべきかな．．．

セフィーはそんな私の様子を見てふふんと心なしか嬉しそうだ

「さ、こつちよ」

言いながらその樹に向かって歩いていく、木の根本には豪華な椅子がありたくさんの精霊が集まっている．．．椅子は子供サイズだ：椅子にはちっさい老人が座っている、シュールだ．．．

私はその前まで歩いていき膝をついた、この方が話しやすいからね、集落の長おさ? いや格好からして間違いなく長（断言）はセフィーと話をしている、聞き耳を立ててみるがよくわからない言語だ、通話が出来ようになる魔術を使えば聞き取れることも出来るだろうが特に会話を聞きたいわけではない、

会話と云えば精霊の言語を学びたい、と言つ願いもあるがおそらく無理だろうなと知恵は心の中でつぶ

やく、これからどうなるか大体解っているからだ、ちょうど話も終わったらしく長がこちらを見てい



た、

ひらひら〜と片手をふって返しておく。

長も気にすることはなく（見事なスルースキルだ）人の言葉を使い言った

「娘よ、お前は悪気がないとはいえ神域に入ったそこでここに関する記憶を封じることにするがよいな。」

確認、と言うより命令のような言い方だったが気にすることはなく、神域を汚しても良い事なんて一つもないのである。

「解ってるって、近くの村あたりに転がしといてね」

長は物わかりの良い私に満足したのか大きくうなずいて周りに指示を出した……

---

気が付くと私は森の中に倒れていた川のせせらぎが聞こえてくる、起きあがり私は何で森にいらんだろうと思いつと出そうとする……

「っ！」

なに、これっ、解らない……私が誰か解らない……此処が何処かも解ら

ない…ただ、頭の中には膨大な量の知識が詰め込まれていた、そのあまりの多さに押しつぶされそうになる。

「っはっ、はあ、はあ」

慌てて思考を止め、心を落ち着けようと日本のある武道の呼吸法を…！なんで、

何でこんな呼吸法を知っているの？こんな物は普通の学校では習わない、どういう事、私は何者なの、何でこんな事になっているの？

これではまるで記憶喪失…

いや、記憶を失っているのだ、まるで、ではなく本当に…

パニックになっていたのだろう、注意を怠っていたせいであることにまるで気が付かなかった

ガサガサッ

突然茂みが揺れて何かが飛び掛かってきた、間一髪、

慌てて体を捻って避ける、

危ない、後もう少しであるオオカミの牙の餌食になるところだった、

驚きつつも思考が冴え渡っていく…

もう驚いている暇はない、戦うしかないと心に決めたときオオカミが飛びかかって来た、

いいタイミングだもしかして待っていてくれたのかなとのんきな感想までも浮かぶ、

今度は落ち着いて横に避ける、再び向き合いどうすべきかを考える、殴ったり蹴ることは出来るだろうがそれでは怒らせるだけだろう、

その時魔法のことが頭に浮かぶ、

魔法？

無理だそんなものあるわけが無い、でも心の奥底では解っている本当に魔法があることもそれを私が使えることも、

使おうかな…この状況じゃ仕方がないよね

覚悟を決め意識を集中する…その時オオカミが飛びかかって来た、え、ちよ待って待って、さっきの空気が読めるあなたは何処にいったの帰ってきてお願い

「きゃー」

思わず悲鳴を上げてしまう、なんだこんな私も女の子っぽいところあるじゃんなんて考えている自分の頭が憎い

オオカミの牙がもう少しで私に届く、とその時に一本の矢がオオカミの脇を貫いた

気が抜けてしまい消えかける意識の中見えたのは逃げるオオカミと一人の青年の姿だった…

## 第二話（後書き）

感想、誤字脱字、改行や句読点に意見がありましたら是非教えてください。

補足 私はその前まで歩いていき膝をついた。この文は別に王様に対する臣下の態度ではないと言いたいわけです。

### 第三話（前書き）

タイトルが…（泣

この話最初はこんなんじゃないやなかったんだよ

何だよ！記憶喪失って、どうしてこんな事になってんだよ設定が破綻してるよ

もおいしいや、このまま何処まで行けるかやってやるぞ！

と、言うことでタイトル変えたいので何か募集中

誰かあらずじ代わりに書いてくれないかなあ

### 第三話

暗い、暗い闇の中で、私は押し寄せてくる記憶の波に時折飲み込まれそうになる、そんな深い闇の中で私は自分の知識を整理していく、

やがてそんな記憶の波も穏やかになっていき、作業が終わった頃には自分の気持ちを整理することが出来るようになっていた、

「私は私、それは変わらないわ」

やがて暗闇に終わりを告げる一筋の光が差し込んできた。

目を開けると青年が私の顔を覗き込んでいた、茶色い髪と同じ色の目をして年は19、ぐらいだろうか、私起きたことに気づいた青年は嬉しそうに笑いながら言った

「タイツガキア」

話しかけられているのは解るのだがどうやら私の知らない言葉のようだ、記憶の中にある知識を使って言葉が通じるようになる魔法を唱える、体の中から何かが抜けて出ていく感覚がある、これが魔

力のようだ、知識があっても覚えていない、とても変な気分になりながらも話しかける

「こ、ここは…?」

のどがかすれて少し痛い、気を利かせた青年が水を持ってくる

「ここは、モアの森の近くにある僕の家だよ、それにしても魔法が使えるんだ、すごいね!」

よかった、言葉はちゃんと伝わっているんだと思いながら水を貰い一口飲む、のどが潤って気分がすっきりした

「ありがとうございます、あなたは魔法は使えないの?」

「使えないよ、使える人はみんな王都に行くからね。僕はユウ、君は」

「私には今、記憶がないのよ、だから名前も忘れてしまったわ」

驚いたようにユウは言い私の顔を見た、そしてしゅんとした顔で

「何か悪かったな、ごめん…」

すっかりうなだれてしまったユウの顔を見ておもわず吹き出してしまった

「な、何で笑うんだよ」

「だって、そんなに悪そうにしているんだもの、私はなにが悪かつ

たのかも解らないわ」

「だ、だって、ほら、その…」

「心配要らないわよ、ほら私はこんなに元気なんだしさ、気にもしてないし、なんならこの世界のことを教えてよ」

話題の変更にユウはきょんととして

「この世界のこと？良いけど何で、僕もあまり知らないよ」

「だってほら、私は記憶喪失だからみんなの前で恥掻きたくないし、ね」

「わかった、じゃあまず……………」

ユウとの会話で解ったことは大体3つ

まず、この世界はラインバルドと言われる世界でありここはイクストよばれる国であること、周りには3国ヨテム、ファールラス、ダリアスに囲まれていること

次は硬貨だ銅、銀、金の3種類であり、それぞれ百枚で銅は銀、銀は金に換えられるようだ、銅貨一枚の価値は日本では100円ぐらいなので金貨一枚で百万円ぐらいである、なお値段の単位はガメル銅貨1枚は10ガメルである

最後に言葉これで通訳の魔法も必要ないし文字も読めるようになった、2時間で出来るようになったら驚かれたが…



疲れたので今日はもう寝よう、そう思いベッドに潜り込む……  
……あ、ユウはどこで眠るんだろっ……

そのまま意識が落ちていった

### 第三話（後書き）

感想、誤字脱字、改行や句読点に意見がありましたら是非教えてください。

## 第四話（前書き）

ちょっと、文の書き方を一人称に変えてみたいと思います。

容姿についての説明をしていなかったのでもここでしょうと思います。何となく三人称で

髪は黒く、目の色も黒、顔立ちは整っていて、背は女性にしては高い170センチぐらい、体型は痩せている方、胸は薄い…、服はジーンズに黒いシャツ、上からパーカーを羽織っている。  
凜とした目が特徴的で、格好いいとも言える。

結果的に見れば美人…と言えないこともない、べ、別に「綺麗だ…」なんて思っていないんだからな！

そんな彼女が本に囲まれた暗い部屋の中でマジックを持ち、鼻歌を歌いながら床に文字を書き込んでいる様子を見ると、なんか、こっぴらむらっと、して…っこない！

と、こんな感じですね。

## 第四話

小鳥の合唱が聴こえる…木の焼ける音と香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる、どうやら外でユウが肉を焼いているようだ。

私は体を起こすと、頭に手を当て、魔法で電流を流す、うん、頭がすっきり。

って、何してんのよ私。

どうやら無意識の内にやってしまったようなので毎朝の習慣なのだろうな、と思う。

…毎朝、頭に電気を流すのって、何よ…

内心ときどきだが、頭がすっきりしているのは事実なので、問題ないと自分に言い聞かせる。

部屋を見渡すと枕元に私の持ち物らしきリュックがある、中を探

つてみると、中には懐中電灯、ノート二冊、筆記用具、かならずちやドライバーなどの工具、数点の魔法具と、銃が入っていた。

「銃！？…いや、まて、まとうね、うん…もう驚かないよ……………」

がんばってスルーする、ちなみに銃はコルト・ベスト・ポケット、小さくて女性にも扱いやすい護身用の短銃だよ。

一冊目のノートには、様々な魔法具の名前、使い方、作り方、備考、改良点などが書いてあった…すべて知っていることだけど、それに発見した場所まで書いてあって半分以上は「自作」だった、裏を見てみると「知恵」と、丸っこい字で書いてあった、中は綺麗な字だったが…、たぶんこれが私の名前なんだろうな…と、思う。

二冊目のノートは何も書いていなかった。

ここまででわかったことを整理してみると、私は日本から魔術（高位な魔法のこと、さらに上だと魔導と呼ばれる）でこちらの世界に来ているみたい（日本の知識が多かったこととラインバルドに転移する魔術の知識があったため）、

何のために転移してきたのが知らないけど…あれ？日本に戻るための魔法はないの？いや、この世界に来るための魔術は魔法陣で座標を指定していただけだから、普通の転移魔法で戻ることも出来

るよね…え、でも転移魔法は自分のよく知ってる場所にしか転移でき  
ないじゃん！、日本の記憶なんてないよ私！建物の形は知ってる  
けど、そのイメージなんて解んないし…

と、言うことは……………

「私、元の世界に戻れ…ない…？」

……………

ま、いいか。どうせ日本の思い出がある訳じゃないし、とすると、  
これからどうするかを決めないといけないなあ…まずは生活が出来  
るように、お金を…

前向きに考えていると、扉が開いてユウが入ってきた。

「おはよう、よく眠れた？」

「おはよ、今朝はぐっすりよ、ごめんね〜ベッド使っちゃって。」

「いいよ、それよりお腹すいてるでしょ、ほら。」

「うん、早く食べよう。」

「あはは、そんなにお腹が減ってるのかい。」

私は、いいからいいからと言って席に着く、朝食はパンに漫画肉だった、ちよつと感動―

「いただきます。」

「いただ…何それ？」

「うん？食べ物の命とそれを料理してくれた人に対しての「いただきます」だよ、日本ではこうするんだ。」

「へ、日本って言う国は聞いたことがないなあ、でも、いい言葉だね。」

ユウもいただきますと言って食べ始める、会話もなくすぐに食べ終わった。

食後、ユウは木を取りだし矢を作り始めた、私をおそったオオカミに刺さったままだから数が一本足りないらしい、私は何となくそれを見ていた。

「そつえばさ、ユウは遠い国の貴族なのかな？」

「な、なんで？」

突然の話題にとまどってしまった。

「だってさ、服は見たことがない形だけど上等だし、肌も綺麗だし、髪もさらさらだよ。」

「あう、記憶はないけど、貴族ではないことは確かだよ。」

どうして、そんな簡単に肌が綺麗とか、髪がさらさらとか、言えるんだろ、ってか見られてたのか、はずかしい…

「ふん、あ痛っ。」

納得したのかしてないのか、よくわからない声を出し、木を切る



うとして指を切ってしまったようだ、その手を取り、治癒魔法をかける、ついでに木も風の魔法で削り出して仕上げる。

「もう、ドジだな」

言いながら、ユウの顔を見ると呆然としていた。

「ふえ、な、なによ。」

「いや…今の何？」

「何って…魔法。」

「いや、魔法って呪文が必要なんじゃないの？それに魔法をそんなふうにする人、見たことも、聞いたこともないよ。」

「あゝそれはたぶん詠唱魔法…そっか、この世界には詠唱魔法しか知られてないのね…」

「魔法には詠唱魔法えいしよつまほうと無詠魔法むえいまほうの二種類があるのよ。

詠唱魔法はその名の通り呪文を唱える方法でね、これには利便な点があつて、まず自分の中で魔法のイメージを作ることが出来るの

よ、それによつて魔法を簡単に使うことが出来るの。

でもね、これには欠点があつて呪文を唱える時間がかかるのと呪文に応用が利かないのよ。

それに比べて無詠魔法は、時間はかからないし応用も利く、でもイメージをつかむことが難しくてなれない内だと失敗しちゃうの。

ここでは昔から詠唱魔法が使われていたんでしようね、だから詠唱なしでも魔法は使えるんだ！つてことに気づく人がいなかったのよ。」

私は一息入れて続ける。

「魔法は絵、魔力は絵の具、技術は筆、呪文は見本 よ、思い描き、自分の魔力を絵にするの、別に見本がなくても絵は描けるわ、ただ魔法は自分でどうしたいかをはっきりさせないといけないから無詠魔法は難しいのよ、まあ、中には見本（呪文）すら、うまく描けない人もいるけどね。

属性なんて気にしないでいいわ、みんな、それぞれ得意な色を持つているのだから、中には「紫しか使えない」なんて人もいるのよ、だから、呪文がないと魔法が使えない、なんてことはないわ、みんなイメージ、絵を描くことは出来るのだから。」

ユウが驚きを隠せないでいるみたいだ。

「君は…一体…。」

そんなユウに私はわざと明るい口調で言った。

「私は私、それ以下でも、それ以上でもないわよ。」

それから私は楽しそうに、いや、実際楽しかったのだろう…

「ユウは魔力は少ないけど魔法の才能はあると思うよ、私が言うんだから絶対、ね。」

ユウはまだポカンとしている、でも、そんなことは知らない。

「うん、私が魔法を教えてあげるよ、あ、でも、このことは他言無用ね、私はうるさいのは嫌いなんだ」

「あ、それと、私の名前は、たぶん知恵、これからよろしくねユウ。」

私は、今、新たな人生を歩き出したんだ。この世界で暮らす第二の人生を…

「よ、よろしく？チエ」

続け！

#### 第四話（後書き）

感想、誤字脱字、改行や句読点に意見がありましたら是非教えてください。

## 第五話（前書き）

ちょっと更新が遅れました。

現在、文章の見せ方を研究中です。  
今回は三人称でいきます。

知恵のキャラ崩壊はいろいろと吹っ切れたためです、たぶん……  
いや、作者の実力不足ですね、うくん普通の女子みたいに話させた  
いのになんか、大人っぽくなる。

追記：ユウ君の仕事は狩人です。

## 第五話

「よし、早速始めようか」

知恵は楽しそうに笑いながらユウの手を取る。

「えっ、ちょっと、チエ！」

「まずは私の魔力を君に流して、君の魔力を活性化させる」ちよつと待ってっば！」「か…ら？」

知恵は大声にきよとんとしてユウを見る、ユウは落ち着いた顔で説明する。

「もうパンが無くなっちゃったから、今日は今から村に行くんだよ。」

「あ…うん……。」

それでようやく落ち着きを取り戻したのか、知恵はばつの悪そうな顔をして謝る。

「その…ゴメンね。」

「い、いや、こっちこそ大声出して悪かったよ……。」

知恵に上目遣いで見られて、ユウはしどろもどろになっている、気まずい空気が二人の間を通る。

「む、村って？」

「あ、ああ、この小屋はムタの村のはずれにあるんだ、だからそっまでパンなんかを買いに行くんだ。」

「そ、そうなんだ……もしかして私のせい？」

「あ、うん、違うんだ、どうせ残りも少なかったから。」  
「うん……。」

知恵は自分がユウに迷惑をかけていると解り落ち込んでしまう

「そ、それに……ほら魔法も教えてくれるでしょ、その授業料だと思えば安いもんだよ。」

「うん……ありがとね。」

仄かに笑って言う知恵にユウは思わず見とれてしまったのだった。

小屋は本当にムタの村の外れにあつたようだ。森から道に出て少し歩くと木の柵が見えてくるのだ、歩いて5分ぐらいだろうか。その間知恵はユウに村のことを教えて貰っていた。

「ロダの村は小さいけど活気のある村だよ。森にある精霊の水がそここの値段で売れるんだ。精霊の水はけがや病気に効くからね。そのお金は村の人みんなに配られるんだよ。」

「へー」

「森の道を進めば泉に着くけど、それより奥に行くと、いつの間にか森の入り口に戻ってきてしまうんだ。あ、森の水を勝手に持ち出したら駄目だよ、村の掟で打ち首にされるからね。」

「解った。」

村の入り口には一人の少年が立っていた。ユウが近寄って声をかける。

「やあ、トーヤ元気かい？」

「ああ、そっちの女は誰だ。」

トーヤと呼ばれた少年が知恵を見てぶっきらぼうに返ってくる。

「彼女はユウ、森で拾ったんだ。」

(森で拾ったって……)とユウは心の中で苦笑しながらトーヤに挨拶をする。

「こんにちは、トーヤ。」

「ああ。」

それから少し言葉を交わして村に入る。

「まずは服を買おうか、その格好じゃ目立つし。」

「あゝ、じゃあ甘えちゃおうかな……。」

確かにユウの格好はこの世界では目立ちすぎている。ユウが看板に服屋と書いてある家に入っていくので知恵はあわてて中に入る。中には中年のおばさんがいた。

「いらっしやい、ユウ。おや、そのお嬢さんは誰だい？」

「ああこの子はね」

ユウの言葉を遮って挨拶をする。



「初めまして、知恵と言います。」

「礼儀正しいねえ。はじめまして、アタシはバノンだよ。」

「きよ、今日はチエの服を見に来たんだよ。ここだとこの格好は目立つでしょう。」

「なるほどね。よし、アタシが見立ててやろう。礼儀正しいお嬢ちゃんだから、お金はいらないよ。」

「えっ！でも……。」

「いいからいいから、そこで座って待ってなさい。」

バノンのご機嫌で鼻歌を歌いながら店の奥に入っていった。ユウが耳打ちをしてくる。

「バノンさんは気に入った人に自分の服を着て貰いたいのさ。」

納得して店の奥に目を向ける。やがて服を持ったバノンが出てくる。身長が高いユウに合わせて、丈の長い、スラツと見える白いワンピースタイプの服のようだ。所々フリルが付いている、どうやらバノンはかわいい物が好きなようだ。知恵はズボンの方がよかったが、バノンに悪かったので文句は言わない。白く青のリボンの付いた帽子まで持ってきて、日傘を持っていればどこかのお嬢様と見間違えるだろう、それぐらい似合っていた。マジで……。

バノンにお礼を言い店を出ると次は食料を扱っている雑貨屋に向かう、途中何人かに声をかけられたが適当にあしらって進む。肩を掴まれたときは足を払って転ばして置いたが……

雑貨屋の店主はザックと言う男だった。雑貨屋には沢山の物がありその中で目を引いたのは魔鉱石で出来たというネックレスである、

魔力の流れを感じたのだ

「魔鉱石??」

「ああ魔鉱石って言うのは魔力が籠もって結晶となった石ころのことだよ。自然の魔力とふれ合っていると、だんだん魔力が溜まっていくんだ。水の中にあつたら水の魔鉱石になるんだよ、これは火山の近くにある火の魔鉱石のようだけど。」

「そうだな、もっともこのサイズになるには三年かかる。」

「三年!? 爪の先もないのに?」

「ああ、このサイズでも金貨1枚ぐらいだからな、親指の爪ぐらいのやつが金貨100枚以上で取り引きされたこともあるらしい。なんだか、これを持っていくと魔法の威力が上がるんだとか、俺は魔法なんてつかえんからよくわからんがなあ。」

「へー……………」

それから二人で買い物をして、小屋に戻った。

## 第五話（後書き）

感想、誤字脱字、改行や句読点に意見がありましたら是非教えてください。

## 第六話（前書き）

今回はユウ視点、知恵視点、など。適当に書きます。

知恵寄りのの三人称が一番書きやすいかな……？　このまま定着するかも。

## 第六話

「さて、早速始めましょうか。」

小屋に帰るとチエがそう言って僕の顔を見る。明るくて元気になれる顔だ。

「まずは何をするの？」

「私の魔力を流し込んでユウの魔力を活性化させるのよ。朝にも言っただでしょ。」

「そうだったっけ？」

首を傾げて思い出そうとしてみると。たしかにそんなことも言っていたかもしれない。

「まあいいわ、それより手を出して。」

「うん。」

「行くわよ……。」

チエが目を閉じると手から暖かい物が流れ込んでくる。それは胸の辺りまで来ると渦を巻き始めた。そこでチエが手を離して（少し残念だ）訪ねる。

「どう、解る？」

「うん、何だが胸が暖かい。」

「そう、すぐに戻ると思うけど。それが魔力だよ、とりあえず今日はそれを操るところからだね。」

確かに胸の暖かさは薄れていく、しかし胸の奥には今まで無かつ

た力を感じる。

「解った。でも魔力ってどうやって操るの？」

「説明するのは難しいけど……目を閉じて魔力を広げていくって感じね。」

言われた通りにやってみるけれど、なかなかうまく行かない。しばらくやっているとチエが立ち上がり、声をかけてきた。

「私はちょっと出かけてくるから、がんばってね。」

「えっ……ちょっと……。」

あわてて目を開けると見えたのは、閉まっていく扉だけだった。

（苦戦してるね。ユウはが目を閉じてから十分ぐらいたったかな？

まあ、急ぐわけでもないから大丈夫でしょ。）

知恵は心の中で呟き立ち上がる。

「私はちょっと出かけてくるから、がんばってね。」

言い残してそのまま扉へ向かう、出るときにユウが声をかけてきたけど心配はないだろう。向かう先は森の奥。自分がどれだけの魔法を使えるのか確認しなければいけない。体に強化の魔法を掛けて走り出す、体が軽い。慣れてきたので木の枝に飛び移り枝から枝へと進んでいく。それにも慣れると次は飛行魔法だ。飛び上がって最

高速度で飛ぶ……周りが森だらけだからどのぐらい早いのかよく判らない。やがて森が終わり草原が見えてきた。

「この辺りでいいかな……」

速度を落として着地する。周りを確認して人の姿が無いことを確かめ、精神を集中させると一つ目の魔法を使う。

(炎よ……！)

瞬間、辺り一面が炎に包まれる。もしこれを森で使っていたら大変なことになっていただろう。それからもいくつかの魔法を放っていく。だいたいの魔法の威力を確認して一息つくと足下の石が光を反射していることに気づく。拾って確かめると石には魔鉱石の結晶が付いていた、色は…赤、付いていた、と言うよりも石の一部が魔鉱石に変質している、と言うべきか。少し考えて石に火の魔力を流し込んで見ると石が見る見ると魔鉱石に変わっていく。

「こんなの初めて知ったから、あっちの世界の石とは違う成分でも含んでいるのかな……？」

だがここで重大なことに気が付いてそんなことはどうでもよくなつた。

「私……大金持ちじゃん。」

そう、この魔鉱石は雑貨屋で見たサイズとは桁が違つ、売ればどれだけの値が付くのだろうか。しかも材料は石ころと自分の魔力だけである。そうして知恵はその辺りにある石を魔法で浮かせてここに顔で小屋に帰るのだった。

辺りはもう暗くなっていた。家の前に着地すると勢い良く扉を開ける。

「たっだいまー」

「うわっ、お、お帰り……何それ？」

どうやらユウはまだ魔力を操る練習をしていたようだ。後半は知恵の後ろに浮いている魔鉱石を見た感想である。知恵は魔鉱石を降ろしながら言う。

「いいからいいから。どう、魔力を操れるようにはなった？」

「うん、もうバツチリだよ。」

「そう、じゃあ次は魔力を集めてみよう。目に魔力を集中させて。」

「こっ……？ うわっチ工真っ黒だよ……」

「そう、魔力を目に集めると、魔力を目で見れるようになるんだよ。次は魔力を体に流して見よう、こんな風にね。」

チ工は実践してみせるとユウが息をのむ。

「うわあ、魔力が血みたいだ……」

「そうね、そのイメージでいいよ。」

「よし、こっかな……」

「うん、出来てるよ。そしたらその魔力に力を込めると、強化の魔法が使えるんだ。これは結構簡単だね、強化の魔法は魔法と言えるほどでは無いけど、魔力を外に出さないからほとんど魔力を使わな



いし魔力を流せば流すほど強くなるからとても使い勝手がいいんだ。  
イメージは自分の中から力がわき出る感じだよ。どう?」「  
「あんまり実感が湧かないなあ……」  
「なら足に魔力を込めて外を走り回ってくればいいよ。出来ていれ  
ばすぐに判るから。」  
「よし、じゃあ。」

早速ユウは外へ駆けていきすぐに戻ってきた。目を光らせてさけ  
ぶ。

「すごい！　すごいよ、チエ！　こんなに早い初めてだよ。」  
「そ、そう。」  
「もつと、いろんな魔法を教えてよ!」  
「それはいいけど夕飯が先よ。もうお腹がすいて倒れそうよ。」  
「あーそうだね。分かった、ご飯の準備をするよ。」  
「うん、よろしくね。」

ユウが夕飯の用意を始めると知恵は木を風の魔法で削って何かを  
作り始めた。しばらくしてユウに問いかける。

「ねえ、これ幾らぐらいで売れると思う?」  
「なにそれ、綺麗な石だね。」  
「ばかねえ、魔力を見なさいよ。」  
「ん?　うわっそれってもしかして魔鉱石?」  
「もしかしなくても魔鉱石よ。で、幾らぐらいすると思う?」  
「そんなの、値段付けないよ……一体どうしたのさ、それ。」  
「ん、ひみつ。よし、これで完成かな。」  
「何作ってたの?」  
「ただの木箱だよ。これ売ろうと思って。」  
「ええっ、それ売っちゃうの?魔法使いなら誰でも欲しがらんじゃ

ないの……」

「いや、私が持つてても、あんま意味ないしね。ほしい？」

「欲しいけど、貰っても大丈夫なの……」

「いや、まだ沢山作れ……持つてるからね。」

「いま作るって聞こえた気がするんだけど……」

「あはは、ねえ、これに魔力を流し込んでみてよ。」

「はあ……分かった。」

ユウはそう言って石を持つもいっこうに変化はない。

「やっぱり私にしか無理かなあ？」

「無理に決まってるじゃん！ だいたいユウの魔力は多すぎるよ。」

「あははは、やっぱりそうだよね。」

「もういいよ、ほらご飯出来たよ。」

「うん、いただきます。」

夕飯を食べ終わると早速ユウが聞きに来た。

「よし、次は何をすればいいの。」

「次は魔力を体外へ出すよ。手のひらから放出して、垂れ流すだけじゃなく形を整えるの。」

知恵は手のひらを上に向けて魔力の玉を作り出す。色は薄い青だ。ユウもやってみるがなかなか形が定まらない。

「だめだ。難しいよ。」

「そんなこと無いよ、たった半日でここまで出来たんだからユウはやっぱり才能あるよ。ほら私の玉をよく見て。」

たしかに、よく見てみると知恵の作った玉は少し渦を巻いている。ユウもそのことに気づいたようで、一分後には完璧な魔力の玉が出来るようになっていた。

「できた！」

「うん。次はその玉に属性を付けていくわ。」

そう言った知恵の玉はまず、燃え上がり次に水になり、風が起り、岩ができた燃え上がった。そのローテーションを続けながら言う。

「最初は一つずつ試してみても。自分にあった属性、色を見つけるの。」

知恵に仕草で促されてユウも試してみるが出来たのは、土と風だけだった。

「まあ、あくまで得意不得意だからそのうち他のも出来るようになるよ。今日はもう遅いから寝ようよ。」

「そうだね……」

ユウは残念そうだったが放っておく。ベッドに潜り込んで目を瞑るとすぐに眠気が襲ってきた。

(あ………また、ベッド使っ………)

第六話（後書き）

なかなか話が進みません。

第七話（前書き）

更新が……

## 第七話

窓から差し込む光が瞼の裏側をくすぐる。目を開けるとまだ来て間もないのに見慣れた天井が見える。知恵は体を起こして部屋を見渡した。ユウが床で毛皮にくるまって寝ている。まだ早い時間のようだ。申し訳ない気持ちになりながらも起こさないように注意してベッドから抜け出す。

(お腹空いてるし、今日の朝食は自分で作ろうかな……)

と考えながら知恵は戸棚に近づき中を見る。中には乾し肉とパン、野菜(にんじんもどき、ジャガイモもどき、レタスもどき、タマネギもどきがあった。)

(ん〜時間が掛からないサンドイッチにしようかな?)

パン2つと乾し肉、レタスもどきを手に取る。風魔法でパンを切り、乾し肉をスライスする。レタスもどきは洗って葉をちぎる。後挟んで出来上がりだ。席について食べる。うん、おいしい。

(それにしても、私は料理の名前を知っていても味は知らないんだなあ……)

そんなことを考えていると、ユウが起きてきた。

「おはよう、ユウ。」

「ん、おはよう、チエ。……それは何？」

どうやらユウはサンドイッチを知らないみたいだ。美味しいのに

な、いや、この世界にないだけかな。

「サンドイッチだよ。」

「サンドイッチ……」

「うん、切って挟むだけ。簡単でしょ。」

「へえ……」

ユウがいすに座って食べ始める。特別何か味付けをしたわけでもないのに気に入ったようだ。すぐにサンドイッチが無くなる。

食べ終えて一息ついてからユウが話を切り出す。

「チ工次の魔法を教えてよ。」

「はいはい。昨日は属性までだったよね。」

ユウはすっかり魔法にハマってしまったらしい。まるで子供みただい。知恵は苦笑しながら話を続ける。

「次は魔法に方向性……力の向きを決めるの。まずはこれを見て。」

手のひらを上に向けて魔力の玉を作り出す、そしてそれを部屋の隅に転がっていた木に押しつける。すると魔力はそのまま木をすり抜けてしまう。

「これが普通の状態。そしてこの魔力の玉に物を吹き飛ばすイメー

ジを与えるの。」

また魔力の玉を木に押しつけると、今度はすり抜けることなく木が飛ばされていった。

「魔力の方向性は形、属性にも相性があるから、そこも考えて見ようね。」

知恵は木を拾ってきて次は玉ではなく風属性で魔力の刃をつくる。それを木に当てると木が綺麗に切れる。それからユウは玉の形でも木を切ってみたり、火属性で切ってきたりとした（木は切れたが断面は焦げている）。

その後ユウが練習を始めたので、知恵は魔鉱石を調べることにした。

（ふーん。魔力だけじゃなくて魔法も込められるみたい。その後は発動するだけ……イメージを組み立てなくても魔法が使えるようになるのね。もしかして私意外にも使えるのかな。）

ふと思いつきユウを呼ぶ。

「なに？」

「ちょっとこれに魔力を流してみて。」

小さな光が出る魔法を込めた魔鉱石をユウに投げる。

「これに？」

「そう、込めるんじゃなくて流すんだよ。」

「どう違うのね……」



「全然違うわよ。込めるはぬぬぬって感じだけど。流すのは魔力を出すだけだもん。」

「訳分かんないよ……」

ユウが呟きながら魔力を流すと石から光が出てきた。私以外にもちゃんと使えるらしい。そのまま流す魔力の量を増やさせてみても光の大きさ、明るさは変わらない。発動する魔法は込めた魔法と変わらない。込めた魔法の大きさによって使う人の魔力も消費されるようだ。しかし魔力が扱えない人には使えない代物である。

（まあ、これはこれで何か作れそうね。）

知恵がまた魔鉱石をいじりだしたのでユウも魔法の練習に戻る。そのまま昼まで過ごしていた。

「ふう、お腹空いたな。ユウもなにか食べる？」

「うん、食べるよ。」

「まあ、昼もサンドイッチだけどね。」

どこかうれしそうユウに見られながら朝と同じ手順を繰り返す。席についていただきます。食べながらユウに話しかける。

「とりあえず出来てたから方向性の練習はいいんじゃない？」

「そうかな？ チエを見てるととても出来てるようには感じないよ。」

「初めてすぐに出来るようになるわけじゃない。今はそれで十分よ。」

「そうか、次はどうすればいいの？」

「次は実戦よ。ユウは狩人だから魔法を使って森の獲物を捕ってくのが目標ね。弓矢とナイフは使っちゃ駄目よ。」

「解った、やってみるよ。」

ユウは意気込んで出かけていく。知恵はその後を見送り呟いた。

「うまく行くといいけどね。」

チエも立ち上がって出かける準備をする。今日は少し大きな町へ行って、魔鉱石を売りに行くつもりなのだ。手早く準備をすませ、帽子をかぶる。扉を開け、出ていくときに一言。

「行って来ます。」

投げかけられた声は誰もいない部屋に吸い込まれ、消えた。

## 第七話（後書き）

もう皆勤賞は出ないけど、がんばって一日一話を目指そう、そうしよう。

## 第八話（前書き）

投稿が……………。

これからは1話1話を長くしていきたいと思っています。

村と町は使い分けて書いているつもりです。一応

## 第八話

小屋を出た私はまずムタの村までやってきた、ここには魔鉱石を買い取ることが出来る人がいないと思ったので、おおきな町のことを聞きに来たのだ。

「おう。今日はユウの奴はどうしたんだ？」

「今は森で狩りをしてるわよ。それよりトーヤは村の外に出たことはある？他の町や村のことを知りたいんだけど」

「俺は村を出たこと無いけど。隣町の口ダってところはスゴい活気があるって聞いたことあるぜ」

「そう、隣町ね。ありがと」

「うん？ もういいのか」

「ええ、聞きたいことは聞けたもの」

私はそのまま返事を待たずに村の中へ入っていき、建物の裏へ回って風の結界（風で光を屈折させる）で姿を隠して飛行魔法を使い空を飛ぶ。しばらく道沿いに飛んでいると立派な町が見えてきた。町の上から見ても人が多いのが解る、そのまま裏通りに着地して結界を解く。表通りに出て道を歩き目当ての店を見つける。

「すみませーん」

この店は宝石店だ、眩しいほどの光が私を迎える。

「おやおや、かわいらしい娘さんだね。どんなのが欲しいんだい」

店の奥から出てきたのはもう七〇も過ぎたようなお婆ちゃんだ。

目を細めながら聞いてくる。

「いえ、ここで魔鉱石を買い取って貰うことは出来るでしょうか」  
「魔鉱石をかい？ 魔鉱石ならギルドが高く買い取ってくれるぞ、  
装飾してあるなら別じゃが……」

「ギルド？」

「ん、ああ、ギルドは傭兵や冒険者の組合じゃな。魔法使いが欲し  
がるからギルドで買い取っているんじゃない」

「なるほど、じゃあギルドの場所を教えてくださいませんか？」

「ああ、店を出て……」

お店を出た私は早速ギルドへ向かう。ギルドの外装は普通の建物  
だが二階に掛かっている大きな看板が目を引き。中の賑やかさも表  
まで伝わってくるようだ。

ギルドの中は薄暗く丸いテーブルがいくつか並びそれをいろいろ  
な人たちが囲んでいる。酒や料理も出すようだ。入ったときに何人  
かの人に見られたがそのままカウンターへ、受付はかわいいお姉さ  
んだ。

「すみません、魔鉱石を売りたいのですが」

「はい、魔鉱石ですね。換金したい物をこちらに出してください」

私はポケットから魔鉱石の入った木箱を取り出しカウンターに置  
いた。一瞬疑わしそうな目をしながらも笑顔で対応するお姉さん。  
プロだ。

「開けてもよろしいですか？」  
「どうぞ」

私が答えるとお姉さんは木箱を開け驚きに目を見張った。  
それは私が水のカツターで形を整え徹底的に磨き上げた物で、ギルドの中を照らしている。

「なんだそれは!!」

後ろのいすに座っていた男が立ち上がり怒鳴りつけてきた。私はびつくりしながらも顔には出さずに答える。

「魔鉱石ですよ」

「ふざけるな！そんな大きな魔鉱石があるわけないだろ」

私はくすくすと笑って男に言った。

「それならこれを使ってみてよ。あなたは魔法が使えるようだしね」「な、なぜそれを！」

見るからに魔法使いと言ったようなローブを着てそれなりの魔力を持っているから。と言いたいところを押さえて男に魔鉱石を投げる。

「うわっ、とお」

男はいきなり魔鉱石を投げるとは思っていなかったのが取りこぼしてしまふ。カツコ悪い……。周りからも苦笑が漏れる。どうやら他の人もこれが気になるみたいだ。

「はっ、やってやろうじゃないか。恥をかいても知らんぞ」

男は恥ずかしさをごまかすように言って魔鉱石を拾い目を瞑る。詠唱に入ったようだ。男の口から言葉が漏れる。

《魔力よ 火の玉となりて 敵を焼け ファイヤーボール》

男の手のひらから火の玉、いや火球と言った方がいいか。一メートルもあるうかという火球が現れる。男も驚いたようで……いや男が一番驚いていたが、魔力の制御が出来ていない。このままだと爆発してしまうので。火球の魔力を掌握し消滅させる。

私は呆然としている男の足下に近づき魔鉱石を拾ってカウンターに戻る。

「それで、幾らぐらいで買い取ってくれますか？」

「え！ ええ、はい。え〜と……ちよつと待っててください」

そう言つとお姉さんはカウンターの奥に引つ込んでいった。気まぐずい空気が流れる……

しばらくしてお姉さんが老人を連れて戻ってきた。

「これを持ってきたのはおまえさんか」

「はい」

「ふむ、わしは一度城で国宝の大魔鉱石を見たことがあるが、手の中に隠れる大きさじゃった。どれくらいの価値があるのか聞くと、それでも白金貨5枚ぐらいだと言っておったから、これは一体どれくらいの価値があるのか見当も付かん。出来れば買い入れたいのはやまやまなんじゃが、ここには今そんな金は無いんじゃないよ。だから王都にいつて買い取って貰った方がいいと思うぞ。」

「あの、白金貨ってなんですか？」



「ああ、白金貨は金貨より上の硬貨じゃ白金で出来ておつて、あまりに金額が高いから一般人なら一生聞くこともないかもしれんのだ」「そうですか。なら今、金貨は何枚ぐらいありますか?」「ん? 金貨なら、そうじゃな、だいたい30枚ぐらいあったと思うが。」

私は魔鉱石を受け取り。呪文を呟く振りをしてから、風の刃で魔鉱石を切り刻んだ。1センチ角の魔鉱石が手からこぼれ落ちる。老人とお姉さん、その他大勢が目を見開いている中。私は魔鉱石を拾い集めてから。満面の笑みで言った。

「魔鉱石を買い取ってくれませんか。」

## 第八話（後書き）

今回出てきた魔鉱石のサイズは国宝　ゴルフボール、知恵製　野  
球ボールぐらいです。

硬貨の設定を弄りました。

銅、銀、金の三種類、それぞれ百枚で銅は銀、銀は金に換えられ  
る、銅貨一枚の価値は日本では100円ぐらいなので金貨一枚で百  
万円ぐらいになる。値段の単位は「ガメル」銅貨1枚は10ガメル  
白金貨も金貨百枚で一枚（一枚約一億円）。

でもガメルって使かわずに「貨」枚って使うかも。ガメルって単位  
はずでに別の小説で使われてるけどまあOKだと思う。

だいたい一食銅貨3枚から。生活費は一日銅貨10枚（約100  
0円）、宿代は最低一日銅貨30枚から。一般人の1ヶ月の収入は  
銀貨5枚です。

## 第九話（前書き）

ん？この小説はおもしろいんだろうか？

## 第九話

その後、全体の十分の一の魔鉱石を換金して貰い金貨30枚を手に入れた知恵は、そのままギルドに登録して（細かい説明はいらないよね）。森の魔物退治の依頼を受けた。魔法を実戦でも試してみたいからだ。

（元はただの石ころだったのになあ）

知恵は大通りを歩きながら右手の金貨の入った袋を見た。持っけていてもジャマだと思い。辺りを見渡すと露天商がおしゃれなポーチを売っている。

（あれでいいかな）

「おじさん、そのポーチ頂戴」

「ん？ これは銅貨15枚だ」

「いま、持ち合わせが無いからこれで勘弁してね」

そう言っけて知恵が金貨を取り出すと露天商が慌てふためいた。

「待ってくれ！ そんなの貰ってもおつりが返せない（金貨一枚約100万円）」

「おつりは払えるだけでいいわよ。こんなところで金貨を使う私も悪いしね」

「だが、それでも全然足りない。どこのお嬢さんは知らないが。申し訳なくて参っちまう」

「なら、これ以外にも二、三個くれない？ それでも駄目なら私が

困るんだけど……」

露天商は知恵の言葉に押されたのか、はあ……と、息を付くとどこか疲れたような顔で言った。

「解った、同じポーチを二つ付けよう。それと、今持ってる銀貨16枚と銅貨34枚だ。」

「ありがとう。儲かるといいね」

おつりを貰い、知恵がそう言って立ち去ると露天商はその背中に小さく声を掛ける。

「もう儲かってるよ……」

(さてと……)

ポーチを買ってしばらく歩いたところで裏通りに入り。魔力を使い次元に歪みをつくる。その中に金貨を流し込んでから次元の歪みを直す。これで取り出すときはポーチから取り出すように見せかければいい。本当はポーチその物に魔法を掛けたのだが、そのためには色々と準備がいるのだ(小屋に置いてあるリュックは四次元リュック)。

そのまま知恵は飛行魔法を使って魔物がいる森へ向かった。歩けば半日ぐらいらしいが一時間で着くことが出来た。早速森を探して回る。初戦闘は歩き始めてから15分頃。水の音が聞こえる開けた場所だった。

「見つけた。1、2、3、4……5匹かな。」

見つけた魔物はワーウルフだった。この二本足で立つ獣からはとも逃げられそうにない。逃げるつもりもないが……。早速木陰から不意を付いて攻撃してみる。

（切り裂け！）

知恵が心の中で魔法を構成すると風の刃が飛んでいく。それは狙いを外さずに5つの首が空を舞った。

「こんな物かな」

木陰から出てきた知恵はワーウルフの討伐部位、バランスを取るための大きな尻尾を取ってその場を後にした。

## 第九話（後書き）

いずれ魔法の設定についてまとめたい……

## 第十話（前書き）

魔法の説明をここでしようと思います。

まず属性。

火、水、風、土の基本四種に

雷、木の中級二種に

光、闇の上級二種と

特殊系統の力、空間、時間の三つがある。

火……火を操ることが出来る（魔法で火を出すことも可）。

使い方は、物を燃やす、熱を発するなど（火を出さずに）。

出した火はある程度時間がたったら消えるが（魔力を使い続ければ消えない）、一度付けた火は魔法とは関係がない、

ただの火なのである程度燃え

水……水を操ることが出来る（魔法で水を出すことも可）。

使い方は、物を凍らせる、傷を治すなど。

出した水、氷はある程度時間がたったら消えるが、一度濡れたもの、凍った物は魔法とは関係がない。時間がたったら乾く、溶ける。

風……風を操ることが出来る。

使い方は、物を切る、気体を操る（難しい）など。

風は魔法を使っている限り操れるが、魔法を解くと自然消滅する。

気体を操るのは相手の顔の周りに二酸化炭素を集めたり。

気圧を変化させ

れる。



土……土を操ることが出来る（魔法で土や岩を出すことも可）。  
使い方は、地形を変化させる（壁を出す、地面からトゲが生える）、土や 鉱物を操る。  
出した土、岩は時間がたつと消えるが、魔法で地形を変えた場合はそのままの形で残る。

つかれた、続きは次回。

## 第十話

「ふう」

二十五頭目となるワーウルフを倒した知恵は、ワーウルフの尻尾を取り終えてから一息ついた。魔法の制御にはだいぶ慣れた、いや、最初からある程度出来ていたのだが……。

「日も傾いてきたし。そろそろ帰ろうかな」

そう言っただけで知恵は立ち上がると町へ向かって飛んだ。すぐに森が終わり草原が見えてくる、草原の途中で風上から血の匂いが漂ってきた。

(いやな予感がする……)

知恵は進路を変更して、血の匂いに向かって飛んだ。その先には舗道された道で襲われている馬車の姿があった。知恵は速度を上げて馬車に向かう。

(あれは賊じゃない?……)

馬車を襲っていた者の姿は甲冑に包まれていた。おそらくどこかの兵士だろう。知恵は飛びながら光の鎖で動きを封じて馬車の中に飛び込んだ。

「はあっ！」

いきなり斬りかかられた……とつさに障壁で防いで鎖でがんじがらめにしたけど……。

中には（私の魔法で）縛られて床に転がっている男と、怯えた顔をしている少女がいた。あわてて少女に駆け寄って体を抱き寄せた。少女が可愛かったからではない！ 怯えていたから慰めているんだ。

「大丈夫？」

「は、はい、平気です。ありがとうございます。」

少女は目尻に涙を浮かべながらも、言葉を返してくれる。だいぶ落ち着いたみたいだ。後ろでもがいていた男はうるさかったので絞める強さを上げる。

「私はチエ、あなたの名前は？」

少女はしばらく迷ってから、落ち着いた声で答えた。

「私は、セフィア・ランスルード・イクス。この国の第一王女です」「そっか、ならセフィーだね。よろしく」

少女、いや、セフィーは一度驚いた顔をした後、笑顔になって言った。

「はい、よろしく願います。チエさん。」

可愛い……。もう一度抱き上げる。これから、どうしようかと考えながら。

## 第十話（後書き）

短い……

あれ？ 精霊の名前と被ってる……これからあいつ出すか解らんけど。

作者が納得いってないので、最初から書き直そうとも思っています。

……どうしよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2938/>

---

私は私。

2010年10月12日03時55分発行